

持続の可能性あるいは可能性の持続をめぐって

亀嶋 庸一*

以下、自分のこれまでの人生の中で経験したことのいくつかを持続可能性という視点から改めて考えてみたい。SDGs というと、ともすれば社会全体、地球規模の大きなテーマとして考えてしまいがちなのであるが、まずは自分自身の身近な問題として見つめることから始めてみたいというのが、その趣旨である。

〈街〉の持続可能性

私が吉祥寺を知るようになったのは1959年、私が10歳の時である。知るようになったといってもその時は通学の際の通過地点が吉祥寺駅であったに過ぎない。その駅も井の頭線のそれだったのであり、今と違って中央線の駅とはつながってはいなかった。中央線もまだ高架ではなく今の吉祥寺通りには踏切があってなかなか開かなかったのを覚えている。吉祥寺の街をよく知るようになったのは成蹊大学に入学してからのことであった。当時吉祥寺は中央線沿線の他の駅と同じような普通の買い物の街であった。今の東急デパートのところに名店会館があり、それが吉祥寺で一番高い建物であった¹⁾。

その吉祥寺が大きく変貌し始めたのは、1970年ごろからで伊勢丹から始まって多くのデパートが次々と吉祥寺に参入してきたのである。同時にクラシックはもちろん、ジャズやロックの音楽喫

茶やライブハウスが、そしてお洒落なファッションの店や、様々な各国料理のレストランで溢れるモダンな街となった。当時の言葉で言えば、「若者の街ジョージ」の誕生である。駅の周りも道路の拡張など再開発が進んだ。大学生の頃までは駅に来るバスが、今サンロードと呼ばれる通りを買い物客でひしめく中を押しつけながら走っていたのをつい昨日のことのように覚えている。今のヨドバシカメラの前の広い通りは住宅街で飲み屋もなく夜になるとほとんど真っ暗となったものであった。

私の学生時代は喫茶店文化の時代でもあった。吉祥寺でよく通ったのが「古城」という名前の大きな、それこそ西洋風の城をデザインした喫茶店であった。贅沢な空間を堪能しながら本をゆっくり読んで長い時間を過ごしたものである。ジャズ喫茶にもよく通った。当時の学生のほとんどがそうであったようにLPレコードなどは高価過ぎるので新譜が出ると先ずジャズ喫茶に行きリクエストするわけであるが、これがなかなかの難行であった。自分のリクエストがかかるまで長い時間待たねばならないのであるが、店の方もコーヒー一杯で何時間も粘られては商売にならないので夏は冷房をガンガン効かせる。これにまず耐える必要があった。次に耐えるのが自分のリクエスト曲が他の常連たちのお眼鏡に叶うかどうかという試練である。曲がかかった時に客はレコードのジャケットを見て、それからリクエストした当の者に

* 成蹊大学名誉教授／成蹊学園前学園長

視線を移す。この時が緊張の瞬間である。その眼差しでどう評価されたかが分かるからだ。こうした一連の修行を経て一人前の常連となっていくのだが、そうした硬派の音楽喫茶はすでに過去の話である。はたして今でもこうした鍛錬の場があるのだろうか。

バブルの後、いくつかのデパートが撤退したものの吉祥寺の文化的エネルギーの火は決して消えることはなかった。確かに、このコロナ禍の下では馴染みの店が惜しまれながら閉まるなど新たな試練を受けているものの今後も吉祥寺の街は「ジョージ」であり続けるに違いない。

〈国家〉の持続可能性

大学院生の時に生まれて初めて海外旅行をした。1976年の夏である。3週間くらいのヨーロッパ旅行であったが、最初の訪問先に東ドイツを選んだ²⁾。当時は冷戦の真っ最中、東欧の中でも社会主義国の優等生と言われていた東独をなぜ選んだのかというと、私の研究テーマであったマックス・ウェーバーの生まれたところが東ドイツのエルフルトという町で、ウェーバー研究者であった私の先生がその訪問記を書かれていたこともあり、それをガイドブックにすれば簡単だろうと安直に考えたためであったが、ドイツ語はもちろん英語も不得手な者にはやはり無謀な旅行であった。

当時のことであるから羽田からアラスカのアンカレッジ経由でパリにつき、そこで2、3日滞在した後、夜行で西ドイツのフランクフルトまで行き、いよいよ東独行きの列車に乗り込んだ。国境手前の西独側の最後の駅でほとんどの乗客が降り、車内には私の他は老齢の女性たちだけが残った。恐らく西側の親戚に会ってきたのであろう。東独にしてみればベルリンの壁に象徴されるように若者の脱出は許せなかったが労働年齢を過ぎた者は

別扱いをしていたのであろう。この駅で乗務員も東独の人と交代し早速入国審査となった。出発前に旅行会社からは東独と日本には国交もないので入国ヴィザの代わりに現地のホテルの宿泊予約券で入国できると言われていたので、そのパウチャー³⁾を見せ両替もしてここまでは順調であった。しばらく走るとなだらかな草原地帯に幾重にも広がる鉄条網が現れた。国境というものを肉眼で見るのはこの時が初めてであった。

エルフルトに着き早速予約したホテルに行ってパウチャーを見せたところそのような予約は来ないと言われ社会主義のお役所仕事はこんなものかと思ったが、とにかく入国には役立ったわけである。しかし、そのあとは結構面倒であった。そのホテルは満室のためか別のもっと安いホテルを紹介され、日本で予約した際に支払った額の差額分を旅行事務所で受け取るようにとのことであった。ところがその事務所になかなか辿り着けなかった。教わった住所に行っても普通の民家しかなく、ここと思われる家の庭で作業していた庭師に聞いても知らないと言われる始末で聞き直すために何度かホテルとの間を往復させられてしまったのである。ようやく辿り着いたのは何度も来た家であった。

疑いながら家のドア開けるともう一枚のドアがあり、何とそこに旅行事務所と書かれていたのである。無事に差額を受け取って帰る時にさっきの庭師がいたので「ここじゃないか」と言ってやったところ、両手を広げて「へえ、そうかい」といったポーズをされた。そうなのだ、外国への移動が自由でないこの国では外国人専用の旅行事務所の存在は一般の国民の目からは隠されていることがようやくわかったのである。

そんなこともありながらエルフルトに何泊かしてウェーバーの生家を見たり隣のゲーテ、シラーやワイマール憲法で有名なワイマールの美しい町

を見学してから、ベルリンに向かった。車中で学生の一団と向かい合わせに座った。最初は彼らの話す言葉が何語なのか皆目わからなかった。すると突然彼らが歌い出したのであるが、何と驚いたことにそれはビートルズのイエロー・サブマリンを彼らの母国語で歌っていたのである。思わず彼らとの会話が始まった。彼らはチェコスロヴァキアの学生であった。ビートルズから始まっている話になった。ビートルズ世代の私は思わず「さすがビートルズは国境もイデオロギーも超える！」と感激せざるをえなかった。しかもチェコスロヴァキアといえば、1968年の「プラハの春事件」で有名であるが、その時立ち上がった市民のプロテスト・ソングとして歌われたのがやはりビートルズのヘイ・ジュードであったことを知ったのはそれからずっと後になってからのことであった。

ベルリンで彼らと別れを惜しんでさてひとまず西ベルリンに出ようと思ったのだが、検問所前で並んでいるとなぜか私だけ列から離され「今警察が来るからここで待つように」と言われた。その時のドイツ語のポリツァイという言葉の冷たい響きは今でも忘れられない。どのくらいの時間であったか待っている間に次第に不安が募り、自分はこのまま西側の世界に戻れないのではと思ったりもした。ようやく警官が来て私のスーツケースを開けさせて調べてから何とか解放された。帰国してからドイツ通の先生に会った時にこの話をしたところ私の長髪をジロっと見て「ヤクの売人にも間違えられたのだろう」と笑われてしまった。ともあれその時の私はもう東はごめんと思い、西ベルリンで何泊かしている間も東側に戻る気はしなかった。東独を再訪したのはやっとドイツ統一

直後の1991年のことであった。今ではもう東ドイツという国もチェコスロヴァキアという国も存在しない。一方は統合のために、他方は分離のために。しかし、そこでは昔同様人々が日々を生き、そしてビートルズを歌っているに違いないのだ。音楽の可能性の持続！

終わりに

目下の最大の関心事といえややはりコロナ禍の下での持続可能性であろう。そういえばウェーバーは100年前のスペイン風邪で死んだとも言われている。人類とコロナウィルスはお互いの持続可能性を求めてまだこの先しばらく戦うことになるだろう。

最近、友人から薦められた金井利之『コロナ対策禍の国と自治体』（ちくま新書）を読み始めたところであるが、コロナ禍ではなくコロナ対策の禍という視点から論じている興味深い考察である。とりあえずご参考まで。

〔付記〕本稿は、成蹊学園サステナビリティ教育研究センターリレーコラム(28)(2021年10月4日web掲載)の記事を本誌に再録したものです。

注

- 1) 吉祥寺の歴史の変遷の写真資料については高橋珠洲彦(監修・編集)、武蔵野市開発公社、吉祥寺今昔写真館委員会(編集)(2018):『吉祥寺今昔写真集』(ぶんしん出版)を参照。成蹊学園と吉祥寺今昔写真館委員会とは地域映像アーカイブ協定を結んでいる。
- 2) 東ドイツの歴史については次の好著がある。著者は成蹊大学および大学院の卒業生である。河合信晴(2020):『物語 東ドイツの歴史』中公新書。
- 3) ホテルの予約証明書。